

岩手県研修の成果報告書

・概要

2023年8月5日～8日の4日間、私は岩手県に国内研修制度を利用し訪れた。研修目的として東日本大震災からの陸前高田市のまちづくりの取り組みを直接学び、持続可能で安全な都市計画の在り方を学ぶこと。東日本大震災の被災地の中心の一つである陸前高田市で改めて震災について被害や復興状況、災害教育、防災教育について学ぶこと。国内有数の馬の生産地ならではの実践がある岩手県遠野市で人と馬によるまちづくりについて実態を知り学ぶこと目的として岩手県を訪れた。6日には、陸前高田市の復興記念公園や奇跡の一本松、市内を訪れ、現在の町の状況、被災当時の実際の被害や当時岩手県で暮らしていた方からのお話を聞くことができた。翌日は「一般社団法人馬搬振興会」の代表理事である岩間敬さんにお話を伺い、遠野市で行われている馬と人の地域づくりの実践である「馬般」を実際に見学し、体験させていただいた。

・陸前高田市

陸前高田市では復興記念公園を訪れ、市内を見て回ることもできた。復興記念公園では、震災発生時の当時の映像や津波によって流された車の残骸が当時の状況のまま展示物として展示されていて震災の規模や被害の状況について学び、当時の陸前高田市の状況を理解することができた。また印象に残っていることとして、津波で亡くなった人々やその家族に関するストーリーが展示されており、被災者の個人的な体験を通じて震災の残酷さと人々の強さを感じることができた。陸前高田市内では、津波の被害を受けたままの状態での震災の記憶を後世に伝えるために震災遺構として残している建物がいくつかありそれらも見ることができた。元は道の駅として利用されていた建物は内部が空洞化した状態で遺されており3階建てほどのビルの屋上部分には「津波到着水位」と書かれている。高さは15メートルほどあり津波のすごさが想像できた。他にも団地や中学校、ホテルも被害を受けた状態のまま維持されていた。そして、震災遺構としてとても有名な「奇跡の一本松」も見ることができた。震災前は約7万本の松があった高田松原で10メートルを超える津波の中唯一生き残った復興のシンボルである。しかし、実際には、津波によって海水に浸かったことにより震災から約1年で松は、枯れ死してしまったと現地の方から話を聞きとても驚いた。ただ「奇跡の一本松」も後世に震災の悲惨さを受け継ぐためにも震災遺構として、保存整備され、私が見ている間にも多くの観光客が訪れる、貴重な観光資源にもなっていた。復興記念公園周辺はほかにも浜辺は海水浴場として利用されており多くの人が利用し復興が進んでいると感じた。

しかし、陸前高田市内の人々は震災後に高台地域に移住してしまっただけでもあり、復興記念公園の周辺以外の地域では何もないうまくまんな土地が広がっていた。震災から12年たっ

た今でも、街づくりとしては開発が進んでいない状況があり、元々は、行政機関や商店街があった中心部は依然として雑草が生い茂っていた。この課題には、一つの原因として陸前高田市をカバーする全長2キロメートル、高さ12メートルの巨大防潮堤が挙げられる。この巨大防潮堤の建設にあたっては計画の段階から賛成派と反対派に分かれていたようで反対派の意見としては生態系が乱れることや景観が失われることが挙げられていたようだ。津波の影響で高台地域に移住する人々は元々多かったが巨大防潮堤建設により建設に反対していた人々の移住に拍車をかけてしまい人口流失の一つの原因になってしまったと話を聞くことができた。

陸前高田市を訪れ得ることのできた成果として、震災の被害を実際に体感することができ、災害への危機感や災害教育、防災教育の重要性を改めて実感することができた。また、復興の実際の進捗や課題を理解し、復興に向けた取り組みや努力を知る機会になった。私は震災の被害を遺し震災遺構として観光客を集めるダークツーリズムに関しては、懐疑的な意見を持っていた。震災遺構があることで被災者の当時に記憶を思い出させ、観光地化することで震災に対して悼む気持ちのない人も訪れると考えていた為である。しかし陸前高田市を訪れて住民の気持ちは震災を風化させない、後世に語り継ぐべきという考えがあり私自身、東日本大震災を思い出し被災者への悼む気持ちを抱く機会になり個人的によい経験になったと感じている。

街づくりの観点から地域復興において、生活環境や景観、安全性といった複数の要因をバランス良く取り入れる難しさを学び、地域住民の意識やコミュニティづくりも重要な要素として捉える必要があることを学んだ。陸前高田市は震災から12年たった今でも街づくりに多くの課題があり、街づくりにおいて重要なのは現地の人々の暮らしである。巨大防潮堤により安全性は高まったものの、生活環境や景観は損なわれてしまい、現在は震災地としてダークツーリズムで観光客は訪れているが時間がたつにつれて震災の風化とともに観光客は減少してしまう。現地の人々暮らしを豊かにするためにも、私自身模索していったらなと感じた。

・遠野市

遠野市では「一般社団法人馬搬振興会」の代表理事である岩間敬さんにお会いし馬般を実際に見学し、そして体験させていただいた。その後引退競走馬を引き取っている家庭にお邪魔し、お話を聞くことができた。その後、高清水牧場を訪れ馬に触れ合う経験もさせていただいた。岩間さんや馬般に関わる人々からお話を伺い馬搬には持続可能な暮らしやSDGsといった観点から大きな可能性を感じた。元々は馬搬、つまり、馬を使用しての荷物や物資の運搬は多くの地域や文化で一般的な運搬手段であった。しかし重機や技術の発展により日本では見られなくなってしまった。しかし馬搬は持続可能な暮らしやSDGsに大きな貢献することができることを学んだ。それは馬搬の燃料が不要であることや環境への負担が少ないことが挙げられる。馬搬には石油やガソリンなどの燃料を必要としないので、

長期間の運搬に適している。また排気ガスなどの環境に対する負荷が少なく、エコロジ的な運搬手段としての利点がある。他にも重機は入れないような道でも馬は荒れた地形や山道でも移動することができるため木を切り倒さずに運搬することができる。このように馬般は地球に対して、環境に対して、負荷の少ない運搬をすることができることを学んだ。しかし馬搬を行う上で問題となるのは馬への調教であると岩間さんはおっしゃっていた。岩間さんは自身が調教師であり、馬搬のために調教した馬は現在 9 匹いる。私たちも馬般を体験させていただき、すでに調教した馬であれば簡単に馬搬をすることができた。私たちが体験している間に地域の子供たちが見学しに来ており遠野市での馬と人との関わりが近いことも感じた。しかし岩間さんは日本で人と馬による街づくりは現状では難しいとおっしゃっていた。危険であるや臭いなどほかにもネガティブな意見が多いという。日本では馬と人による街づくりは厳しい現状があるため、岩間さんの活動は世界でも行われている。アフリカで馬によるエネルギーの畜力活用や馬タクシーのある西欧での活動など様々な活動を行われていた。将来は海外で馬搬や馬による街づくりが広まり日本に逆輸入したいと考えているそうだ。

今回、遠野市を訪れ馬搬について学び遠野市では人と馬が共存できる環境があったと感じる。馬搬だけでなく草刈りとして馬を放牧して草を食べさせることで人の負担を減らすなどの試みも行われていた。しかし日本では狭い土地や馬と人の距離を縮めることに反対な人も多いことを知りとても残念に感じた。しかし岩間さんの活動がより世界に広がり日本でも取り入れるようになることを楽しみにも思います。

今回の岩手県での研修は多くのことを学び様々なことを考えるいい機会になったと感じています。今回学んだことに継続して関わったり考えていけるよに努力していきます。